

まず、発信者を決め、発信者はシートを用いて2つの事象のうちの一つを選んで説明します。受信者は「受信シート」にメモを取ります。次に、もう一つの事象を受信者、発信者を入れ替えて発表します。このシートは教師が回収し、ABC段階などの評価を行い、シートにコメントし次時にフィードバックするという手法をとっています。

公開シートのように、教科ごとに統一した一つの様式を用意しつつも、「POSシート」のように、教科担任が独自に開発したものも積極的に活用してもらおうようにして、教科担任の自由度を確保していけばいいのではないかと思います。

私は、AL推進は、教師の自立性・創造性を損なう方向に行われてはならないと考えます。

それは、評価においても同じです。現在、岩手県の高校教育では、観点別評価が本格的に展開されようとしています。現場では、観点ごとに期末テストの設問をつくるのか、各観点の評定の割合はどうするのか、関心・意欲・態度の評価はどう数量化するのか、それはループブックなどで毎時間行うのか、ペーパーテスト以外の評価で説明責任が果たせるのか、等々の疑問や不安が噴出している状況です。

このような状況が進めば、ただでさえ多忙を極めている教師の疲弊感が増し、思考停止に追い込まれ、結局、本来目指すべきであった、生徒を主体的に動かす授業を考えるとや、学力を可視化する授業をデザインすることがないがしろになってしまいます。

そこで、ループブックによるパフォーマンス評価などを、成績評価として行うのは、頻繁にはではなく、単元のまとめの活動などの場面で行えばいいのではないかと思います。その際は、生徒にも評価規準を明示しておく方がいいでしょう。

また、今、現任校で話しているのは、期末考査時に「これまでの学びの報告書」と「これからの学びの計画書」などのレポートを課し、ポートフォリオ評価を行うという手法です。これは京都大学の高大接続入試をヒントにしています。

私は、かつて単元が終わるごとに、グループで成果物をつくり、表現する活動を入れたことがあります。それは、単にレポートではなく、「これまで学んだことマップ」「絵本」「動画」「寸劇パフォーマンス」などです。当時は、これを成績評価に入れることはしませんでした。ALの進展とともにこのような活動は生徒の主体性を育てる評価法として注目されるのかもしれませんが。

● 教師集団の組織化について

- 1 教員のコンセンサスをどのようにとっているのか、時間のなかで、ここまでの組織的取組を達成する秘訣は？
- 2 学校全体で取り組むときの工夫は？
- 3 学校全体で方針を決めて行う→教諭はどう動いていけばいいか。
- 4 大野高校のような学校で導入するときのポイントは何？
- 5 生徒・保護者を巻き込んでいくにあたって注意すべきことはありますか。
- 6 管理職として今の職場で何ができるのか見つけないと・・・。
- 7 先生方をその気にさせる術？
- 8 相手の考えをより深く読み取るために必要なことは何ですか？受け取るための力は？
- 9 (やる気を感じられない) 管理職を動かして取り入れていくにはどうやって進めればいいですか？
- 10 全体で取り組んだ方が生徒も受け入れやすい。どうやって学校全体をその気にさせるか。
- 11 授業方法の共有については、授業見学、公開シート以外に何かありますか？
- 13 全職員をどうまとめるのか。
- 14 なぜディベートにしたのか。ディベートは勝敗をつけるのか。
- 15 アイデアの共有をスムーズに行うには？

【コメント②】



まず、盛岡三高が行ってきたSDプランについて述べます。これは、総合的な学習時間を1年生は課題解決型学習とプレゼンテーションに、2年生はディベートを1年間通して行うというものです。

ALがやや前のめりともいえる状況が進められている今、懸念されるのは、「必ずグループワークを入れること」などといった、形式的な授業手法だけが上意下達されていくことではないかと思います。

ALを組織的に進める際に共有すべきは、その理念や教師集団のマインドセットであり、授業手法ではないと私は考えます。そして、そういう授業が行えるような基盤をつくるこ

とが AL を推進するための支えになると思います。

SD プランのオリジナル教材は、毎回の指導演、補助資料等も充実していて、非常にクオリティの高い内容だと自負しています。これをカリキュラムの中心に実装し、全職員が全生徒に行くことで、教師のマインドセットが変わり、自ら課題を見つけ、協働で問題解決をし、互いに傾聴・発信する生徒を育てる土壌が形成されることが期待されます。そして、その取組が授業改革にも結びついていくことが目標です。

また、教員が転勤しても SD プランはコンテンツとして残るので、持続可能な取組のエンジンとなるものと思います。

次に、私が行ってきた組織的な取組について述べます。まず、年度当初に「参加型授業リーフレット」を作成しました。AL の実践がスタートを切るためには、その道標となるガイドラインの設定が必要です。本校での AL の定義、目的、授業の一例、Q&A、今年度の具体的取組などを 4 月の段階でまとめ、職員会議において、全職員に配布し、取組の概要を説明しました。このようなリーフレットは、学校ぐるみの AL を進めるための活動の評価規準となるものであり、各学校において授業手法の見直しを行う前に、職員間で協議し、立案・設計しておくべきであると考えます。

また、授業方法の共有と、職員の一体感を高めるために、徹底的に授業を参観し、見所を、ダイジェスト動画や参加型授業通信にまとめ、ライブラリ化し校内 LAN 上に置いて共有しました。更にこれを DVD にまとめ、希望に応じて学校外にも配布しました。このことや、各所で行った講演などがきっかけとなり、他県の志の高い先生方から共感をいただき、学校訪問が増えました。その訪問の機会を捉えて情報共有や授業改善を行うなどのポジティブな循環ができたのではないかと思います。

ここまで、どちらかという管理職の視点で書いてきましたが、一授業実践者として、AL を広めていくにはどうすればいいのでしょうか。

皆さんは、Face Book にある「反転授業の研究」というグループをご存知ですか。田原真人さんという方が運営しています。このグループでは校種、職種、職域を超えた志の高い凄い方々が、全員フラットな立場で、互いを尊重しながら議論を深めています。私はこのメンバーからインスパイアされています。このような全国的なネットワークを見つけ、情報を受信・発信し、共有していくことが、今、公教育の教師にこそ求められているような気がします。ティーチャープレナ

ーという言葉が普及しつつありますが、教師は起業家のようなマインドで自ら発信し、仲間と共存することで、自分の職場の半径1mから変えていくことから始めれば、管理職を動かしていくことにつながるのではないかと思います。

できない言い訳をする前に、どうすればできるかを常に考えて、小さいことからでもいいので、前向きに行動することが大切だと思います。

● AL で生徒がどう変化したか

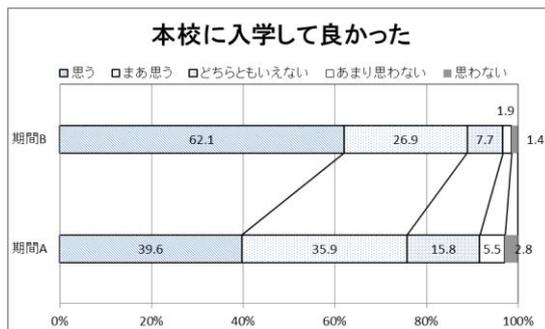
- 1 生徒の学び方が授業の外でどのように変化したか。
- 2 自習中の生徒の変化が知りたい
- 3 盛岡三高の不登校の生徒は減ったのですか？

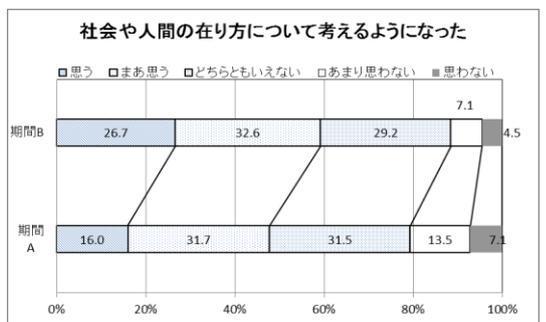
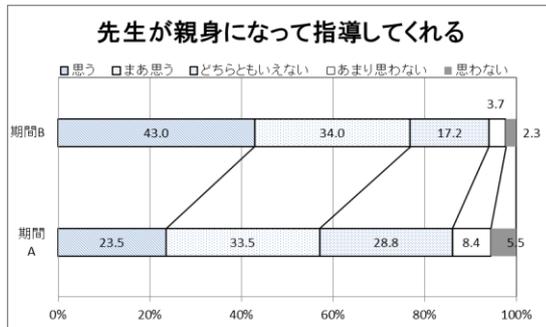
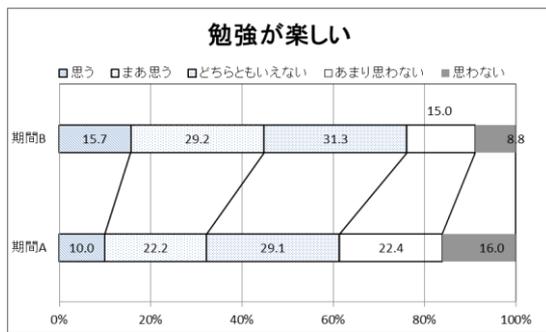
【コメント③】



AL の評価というと、生徒の成績を評価する手法だけでなく、生徒の学力を可視化するような授業であったか(授業評価)も併せて考えていかなければなりません。また、組織として AL を行う以上、その体制や計画は期待した効果をあげたのか(AL の推進体制の評価)、AL によって生徒がどのように変容したか(育てたい力が身についたかの評価)など、大きな枠組みでの評価も議論していく必要があります。現在、盛岡三高、大野高校では、岐阜大の田村先生、リクルートワークスの辰巳先生と連携を取って、生徒の態度の変容を評価するテスト(Prog の高校版)を実験的に導入しています。このような評価テストが各学校で標準装備になればいいのではないかと思います。

参考までに、盛岡三高で行っている学校満足度調査における、学校享受感や人間関係についての項目について、未履修問題発生以降の平成 18 年度からの 5 年間(期間 A)と、SSH・SD プラン・参加型授業が一体的に進められた平成 23 年度からの 3 年間(期間 B)の 2 段階での状況の変化を以下にあげます。



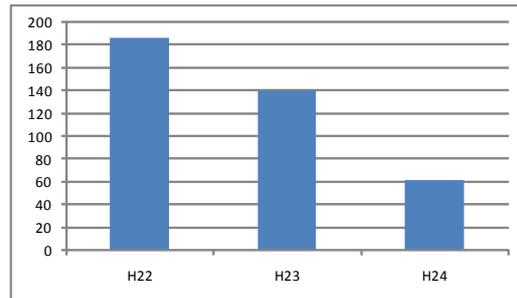


もちろん、様々なパラメータが考えられるので、この右肩上がりの結果が AL 推進によるものとは断定しませんが、期間 A と期間 B で学校が本質的に変容してきたことが見られるのではないかと思います。

次に、不登校問題についても触れておきます。期間 A でのデータが無いので数値的には示せませんが、不登校生徒や、保健室利用率、教育相談案件などは明らかに、期間 A から期間 B で大きく減っているかと思います。

次のグラフは、平成 23 年から 3 年間の保健室利用者数と、教育相談の訴え件数の推移です。

教育相談の訴え件数



このグラフを見ると、年を追うごとに、顕著な減少傾向が見られます。しかし、私はこのグラフの説明を行う際、この原因が SD プランや AL 型授業の成果だとは話していません。

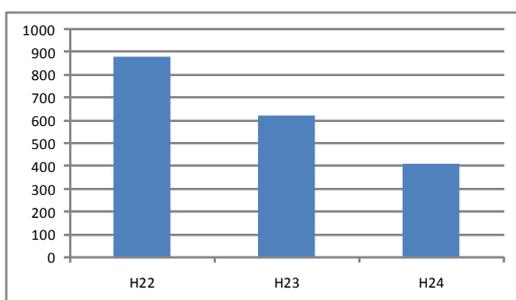
ポイントは、養護教諭の指導にあるのではないかと考えているからです。養護教諭は、着任以来、保健室利用者自身による主体的な保健室利用を実行してきました。ベットで休息をしたい生徒は自分で時間を決め手続きを行います。そこには、自分の身体と心に責任を持つという、社会の中で生き抜いていける生徒を育てようという視点があります。いわば、トランジションを見据えた指導です。また、この養護教諭は、毎年、保健委員会と科学部によるコンタクトレンズの細菌培養の実験を、昼食時間を利用して行っています。ここでも生徒の主体性と参加型の精神が求められています。

私がいいたいのは、AL は単なる授業の工夫ではなく、トランジションを視野に入れた教師のマインドセットによって進められるものだということです。

であるなら、AL の推進は、授業を行う教師だけで行われるものではなく、養護教諭も含めた、学校が総がかりで行うものであるということです。

※自習中の生徒の変化については次に記述します

保健室利用者数



● ALによる疲弊や苦勞、不安

- 1 教師の1日の時間の使い方は？（予習や準備が大変そう）
- 2 全部の教科・科目でアクティブラーニングをする必要があるのか。
- 3 生徒の疲労度はどの程度か。定着度が気になります。
- 4 AL型を毎回行うことができるのか？
- 5 いい授業だと思うが、実際に教える内容がおいつくのか。
- 6 授業の進捗はどうなっているのか。プリント等も活用しているのか。
- 7 各教員が準備に要している時間とその確保は？
- 8 追い立てられる授業がいくつか見られたが、これこそ一昔前の新幹線型授業を繰り返しているように感じる。テンポの良さが必ずしもALとは限らない。
- 9 時間制限で生徒を追うのが主流なんですか？もう少しゆったり考えさせてもいいのでは？
- 10 生徒の中に毎時間参加型授業に出ることで苦痛を訴える子はいないのか。

【コメント④】



産業能率大の小林昭文氏は「日本教育」NO. 444 4・5月号に「主体的な学び」というテーマで、次の文を寄せています。

溝上氏は以下のようにも言います。「ざっくりばらんに言えば100%ワンウェイの授業でなければ、AL型授業といつてよい」つまり、大半の教員が実践している授業は定義に従えばすでにAL型授業だということになります。校長（リーダー）はまずこの安心情報を理解し、教員に伝えることが必要です。

まず、AL型授業はそんなに高いハードルではないということを押さえておいてよいのではないかと思います。そして、毎時間ではなく、機会を捉えて何回かに1度でもいいので生徒の外化を意識した授業を組んでみることから始めてみていいのではないのでしょうか。

さて、ペア・ワークやグループ活動の授業に対して、「それでは教科書が終われない」という意見をよく耳にします。

私は、授業とは教師が効率的に教科書の内容を伝える場であるか、生徒の創造力を伸ばし、自ら学ぶ力を育てる場であるか、という点に立脚して語るべきと考えます。

ここで、少し長くなりますが、國學院大學教授の里見実氏の著書「学校を非学校化する新しい学びの構図」から引用したいと思います。

「大変結構な理想論ではあるけれども、いかんせん“時間が無い”という反論である。「講義式の授業ですら、教科書の内容をすべて教え切るのは困難なのに、まして、そのような時間のかかるやり方をしていたのでは、必要な知識を生徒に習得させることはとうてい不可能である」という議論である。（略）

実際には時間が無いわけではない。時間はある。その時間をどう生きるかという選択の違いがあるにすぎないのである。むしろ、自分で活かすことのできない時間があまりにも多すぎるから、教科書や指導書の指示にもとづいて、時間を埋めているというのが本当のところではないかと思う。「必要な知識」なるものは、そのための隠れ蓑として使われているに過ぎない。＜能率的に＞教科書の内容を生徒の頭に移し入れている（つもりでいる）教師たちは、だが、そのことによって、生徒の精神を受動化し、知識をみずからのものとしてつかみとる力を、彼らから奪い取っているのである。知ることの楽しさを、つまり物事の中に深く入り込むことの楽しさを失っていくのである。（略）

対話にもとづく知の探究を「時間の浪費」と考える教師たちは、学習者を人間的主体性を欠いた物と化すことによって、知識そのものを死物と化しているのである。どんなにすぐれた知識でも、人間が人間であることをやめるような仕方ですぐそれが習得されているかぎり、それは、精神をいっそう無力化する重圧となることはあっても、たえず物事に問いかける活発な精神を育む力とはなり得ないだろう。その意味では、一見能率的な知識の注入は、かえって時間を無駄に使い捨てているのである。

僕らが時間を節約し、手際良く、教科書のすべての知識を生徒達に伝達したとしよう。生徒達の社会を読む力が、それでいささかなりとも、高められるであろうか。回答は教師自身が、誰よりもよく知っている。いや、それは、教師自身の姿において、すでに示されている。

少し、というかかなり辛辣ですね。

ジグソー法、反転学習などは教科書の内容を網羅するだけではなく、多角的に教科書の内容を構成していく手法

でもあり、有効に進度と深度を確保できるのではないかと思います。

「追い立てられる授業」「一昔前の新幹線型授業」

恐らく世界史の授業動画を見ての感想ではないかと思いますが、なぜそのような見方をするのでしょうか。

私が感じる「一昔前の新幹線型授業」とは、生徒に考えさせたり、発言させることをせずに、教師が名物予備校講師よろしく、ひたすら語り倒し、課題を一方向的に与え、ドリル型の問題を次々繰り出して解かせていくような授業です。

彼の授業はその対極と私は思います。彼の授業のポイントは、生徒に「考える習慣」「思考パターン」を身につけさせることを目的にしているところです。

教師の発問パターンは、生徒の思考パターンを形成し、考えるクセ、学ぶ態度を創りだすものであります。それほど教師の責任は重いということです。考える⇒記述する⇒表現する⇒修正する、という一連の活動によって、世界史の授業だけに留まらない学力に転移していくことが言えるのではないのでしょうか。また、50分の授業を5分に圧縮しているのでもせわしく見えているだけではないかとも思います。そこは少し想像力を働かせて欲しいですね。

＜自習中の生徒の変化＞

盛岡三高の参加型授業を牽引してきた鈴木指導教諭(現教育センター)の地理の授業は、毎時間、言語活動、ペアワーク、グループ発表を軸としたアクティブな授業を行っています(野暮なことですが、地理の進研模試のSSはたいてい東北1位ですし、教科書を超特急で終わることはしません。因みに世界史の駒込も同様です)。彼のクラスの生徒は、教師が不在になったとき、自然とペアを作って教えあいをしています。これは、彼の授業によって、自ら考え、他者と知識を構成していくクセ(マインドセット)が身についたのではないかと思います(この様子は動画ファイルに入っています)。

● AL型授業のやり方について

- 1 授業のやり方をどのようにしたら良いかとても悩ましいです。
- 2 以前からの授業との違いがはっきりしないところがある。
- 3 ALの方法はすぐには習得できないのでは？
- 4 ディベートって何のこと？
- 5 反転学習の方法について
- 6 高校ではアクティブラーニングの考え方がどれほど広まっているのでしょうか。
- 7 一授業の中で時間を区切ることは必要でしょうか。

● 協働型授業への疑問・不安

- 1 グループを作る上で気をつけることは？クラス内なら誰と誰でも良いのか。
- 2 グループワーク、ペアワークなどで生徒の発言が多くなると教室が騒がしくなるが、隣の教室、隣の授業へは、どのような配慮をしているのかなと思いました。
- 3 ペアをつくれぬ生徒をどうすればよいか？
- 4 コミュニケーションが苦手な生徒はどんな反応ですか？どんな支援を工夫していますか。
- 5 グループやペアで会わない生徒とかがいたらどうすればよいか。
- 6 生徒の座席はどうしていますか？ある程度仲良しな人と隣同士の方が活発になるのかなあ。

【コメント⑤】



「グループ活動だと教科書が終わらない、グループ学習は騒がしく秩序が乱れる、グループになじめない生徒はどうするんだ...」本当によく遭遇する質問ですね。

偏見かもしれませんが、私はこのタイプの質問の裏には「私はグループ活動が嫌いなのでやりたくありません」というメンタリティが働いているように感じます。

この質問に対して、2つの視点から私の考えを述べたいと思います。

一つ目は、グローバル社会、共生社会を生きる人づくりという大きな視点です。人間は他との関係性を抜きに語れない存在であり、人間関係の育成は、授業、学習という場でも育てられな

なければならないということです。授業が学校という空間で行われるならば、そこは、自分に向き合うだけでなく、共に歩む仲間とのつながりを深めていく場と捉える必要があります。ここで、授業という場で人間関係を再構成することに価値があることを強調したいと思います。人間関係は中学時代の友人関係や部活動での人間関係だけで十分で、授業は個々が孤立していいのだという考えは、極論かもしれませんが、いじめの温床にもなりかねません。因みに、盛岡三高は100種類の中学校から生徒が集まっています。1人だけで来ている学校は 40 校あります。そのような生徒にとって、授業が人間関係をつくる場になっていることは、彼らにとって、ありがたいことではなかったかと推察しています。

人間は他者と共にあるとき、より賢くなり、より強くなり、より多くを達成できる。これは教師の持つべき見識ではないでしょうか。できない理由を探すのではなく、どうすれば人間関係を築く安全・安心の場にできるか、日々工夫するのがコーディネーターとしての教師の役割かもしれません。

二つ目のポイントは、グループ学習とALの誤解です。ALに否定的な人は、AL＝「グループワークによる賑やかな授業」という誤解をしていることが多いと思います。グループワークを入れなくてもALにはなるわけですが、学習者の「外化」を求める機能として、グループ化が適切であるから行うということです。

確かに、小中学校で、あまりにも形式的で、管理されたグループワークにばかりに浸かっていけば、辟易してしまっている人も少なからずいるかもしれません。私は、高校では、例えば、グループワークを行っているとき、1人で考えたい生徒がいたら、それはそれでよいとすとか(盛岡三高はそういう感じ)、自由度を増して「グループ活動ありき」の授業にならないように、生徒と教師がコンセンサスをとればいいのではないかと思います。

グループワークといっても様々あります。最近多く用いられる「ワールドカフェ」はグループのメンバーを交流させますし、OST(オープンスペーステクノロジー)は、グループに参加せず立ち止まる生徒や、様々なグループを行き来する生徒の存在を認めながら知識の構成を行います。私は、グループ発表に時間がかかるので、OSTの手法を基に、「カオス」という方法を考案し、しばしば用いています。是非、皆さんも自分なりのスペシャルな方法を考えてみてください。

● 進学指導に対する不安

- 1 進学校ではじめると、保護者から心配の声は？それに対応？
- 2 大学入試がどの様になっていくのか？
- 3 ALはいわゆる学力の向上につながるのか？
- 4 従来型の授業をしてきた者にとってALへの転換は勇気がいると思う。例えば生徒の学力が伸びるのか？という疑問など・・・。
- 5 共通テストは大丈夫？年間指導計画がすべて終わるのか？
- 6 学習の量に対して時間が足りないときの工夫や考え方は？
- 7 下準備はどれくらいかかるのか。どのように時間を作っていくのか。
- 8 予習の必要性に対し、どのように生徒に理解しやらせられるか。
- 9 各教員だけではなく、各教科科目の担当で共通教材を使用し共通授業を行っているのか。

【コメント⑥】



いくら文科省が「ALの推進」を叫んでも、特に進学校と呼ばれる高校では、入試対策を基準にしたカリキュラムによって授業を行い、生徒はそれに従って勉強するという構造は簡単にはなくなる現実が確かにあります。つまり、どんなにALの意義を力説しても、大学入試制度が抜本的に改革されていない状況の中では、職員の意識を統一することは難しいという意見ですね。

しかし、そのような中にあっても、授業改善に熱心な教師は、そんな現実と折り合いをつけ、進学力を高めることをゴールとする授業を行いつつも、トランジションのテイストを少しでも取り入れる努力をしています。このような一歩が、次の一手を生み、周囲を巻き込み、大きなうねりとなることを期待し、私は今、旗を振っています。

とりわけ、年配の先生方が授業改善にコミットしてくれることで、その学校の進めるALは、より一層推進されると思われます。年配の教師が有している「昔取った杵柄」的リソースに、アクティブな要素を取り入れることは鬼に金棒であり、それによって教師は、よき授業者から、生徒の創造力のよき促進者となりうと思っています。

今、評価テストの導入や、京都大学での高大接続特色入試など、大学入試も着実に変貌しています。

文部科学省教育課程課長の合田哲雄氏は、「成熟社会における教育課程」の中で次のように述べています。

優れた実践を特定の学校や、教師の「個人芸」から、組織的な取り組みとし、我が国の学校教育の「標準装備」とすること。そのためには校長を中心としたカリキュラムマネジメントの確立が必要である。さらに、高校教育、大学教育、大学入試の「一体的改革」を次期学習指導要領の改訂と同時にすすめること。

AL が推進されると、教員間の連携は更に活発になり、恐らく準備も今より多く必要になるでしょう。そのため、いかに学校現場で、ECRS の視点に立ち、教師の業務を整理し、授業改革という本務に向かえるようにすべきかが、教育行政や管理職に与えられた課題だと思います。

「ALは学力の向上につながるのか、学力が向上すればALだろうが一方的だろうがどちらでもいいのでは」

これも本当によく耳にする質問ですね。この質問を考える前に、まず、学力とは何かについて簡単にまとめておきましょう。

「学力」とは、平成 19 年に改正された学校教育法第 30 条によって、学力の3要素として、以下のように定義されています。

ア 基礎的・基本的な知識・技能

イ 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等

ウ 主体的に学習に取り組む態度

授業とは、生徒に身につけさせたい力、というゴールがあり、そこから出発し、展開を練り、実施されるべきもの。その上で、評価とは、「身につけさせたい力」がどのような形で生徒の中に実現、構成されたのかを可視化させ、その実現具合を数値なども使いながら推し量ることであり、その結果から自身の授業改善にフィードバックしていくことでもあります。

では、これまで学力の評価はどのように行われてきたでしょうか。

例えば、直近のテストの点数を上げるために、課題を与え、ドリルを繰り返し、必要な部分だけを何度も教えるなどの授業を繰り返せば、当然その後のテストの点数は上がるはずですが、それと引き換えに「テストに出ることしか学ばない」「余談的な内容や発展的な内容にはソッポを向く」「学び続ける力がなない」「テストが終われば忘れる」など、失うものも多いはずですが。

学力の法的な定義や AL の提唱は、そういった学びの現状における反省を踏まえて登場したものであると理解しておくべき

だと思います。

つまり、AL とは、学力が、単なる知識・技能ではないというところに立脚して設計された学習形態であり、そのような学力を評価するために、学習者の活動の外化・パフォーマンスが求められるのです。

ですから、「学力の向上につながるか」という問いに対しては、次のように答えたいと思います。

『『学力』には、知識・技能だけでなく表現力などの能力や主体的に学ぶ態度なども含まれる。ならば、まずは授業でそれを可視化しないことには評価そのものが行えない。一方通行の授業ではそのような能力を可視化することができない。また、ALによって、学ぶ態度が変化し、結果としてセンター試験の得点や大学進学実績の向上につながるのかもしれないが、その場合、評価すべきは『学ぶ態度』の変化ではないか。』

教師が目指すのは、注入した知識・技能が、後のペーパーテストでアウトプットされたかどうかを測定するのではなく、生徒に、世界を広げる力、自分のその先を大きくしていこうとする力を培うことではないでしょうか。それが、きっと受験に立ち向かう力にもなると私は信じています。

● 基礎的な知識の習得と AL

- 1 基礎的な知識を学ぶ様子はどのようなものか？
- 2 基礎学力が備わってこそその AL ではないでしょうか。
- 3 大野高校の（数学が苦手な生徒達の）生徒の伸びはいかがですか？
- 4 キソノキソの定着方法の工夫を知りたい。

【コメント⑦】

「ALは基礎力のない生徒たちにはできない」



本校でもこのような意見がしばしば囁かれます。そして、ALの公開授業というと、「やりやすい」進学コースで実施することが多いですね。

全国的にみても、ALは大手予備校や大学が積極的に推進している面もあるので、大学教育や大学受験という文脈の中でALが論じられていることが多いのも事実です。何となくAL推進の急流の中にありながら、いわゆる低学力層や、就職希望者層が取り残されているような気がするのは私だけでしょうか。

私は、まず、高校から即社会人になるような生徒たちにおいてこそ、トランジションの視点を持ったALが必要であることを力説しておきたいと思います。

「基礎を学んだ先にALがある。だから今はまずALではなく、基礎をしっかり行うべき」

こんな言葉をよく耳にします。でも、基礎力を学ぶ課程をALにすることはできないのでしょうか。基礎力がない生徒には、教科の面白さや奥深さを伝えることは不可能なのでしょうか。

手前味噌な話で恐縮ですが、私は初任の頃、

$$x^2 - 5x + 6 = \text{夕毛ぬ} \quad x^2 - 3x - 4 = \text{いもぢぢ}$$

という答案に出会いました。もちろん学力検査0点で、授業中にいなくなったかと思うトイレでシンナーを吸っているような生徒でした。このような生徒たちに数学を教える意味があるのか、などと悩み、試行錯誤を繰り返しました。結局、生徒とともに数学を楽しむという考えに到達し、グループ活動でフィールドワークや実験を行い、レポートを作って発表し、紀要を作る取組を行いました。すると、生徒が非常に乗ってきて、日々の授業が楽しくなりました。この経験は、以後の私の教員人生を決定付けたといっても過言ではありません。

子どもは、小学校以来、学校生活の中で、「幸福とは未来のどこかにある。だからつらい勉強を頑張って、そして先生のいうことを一生懸命聞いて、その先にあるはずの目標を達成した時、幸せになれる。だから、今はつらくても目標に辿りつくまでは走り続ける。」そんな風に言われてきたのではないのでしょうか。

しかし、私は、その幸せは、苦勞の果てにようやく最後に獲得するものではなく、今ここで行動すること自体に幸せを見出しながら進んでいくべきだ、と思います。

それは、東日本大震災からの復興の状況を見て感じたことでもあります。「復興の取組は辛い仕事だけれど、その後の未来のために必死に頑張ろう」ではなく、復興活動そのものを魅力ある能動的なコンテンツにすることで、被災地の人々が今を生きる糧となるということです。

話がそれましたが、ALは、その登場の際、ラーニングピラミッドとともに語られました。ラーニングピラミッドの妥当性の根拠は示されていないので、妄信的に利用するのははばかれますが、基礎・基本の定着の中にこそ、ワンウェイではない、AL型授業を取り入れることが必要ではないかと思っています。そして、授業のユニバーサルデザインなども含め全校で組織的に取り組んでいくことが活力のある学校づくりにつながると 생각합니다。

● 実技科目での取組について

- 1 実技科目の実践はどのようなものなのか？
- 2 実技系の授業のALはどのように進められているのか。

【コメント⑧】



盛岡三高では、5月に全職員に教科指導の方針を明示してもらっています。その中で、ある体育の教員の教科指導方針は次のようなものでした。

- 実技を通して集団行動のあり方を指導する。
- 種目を通して生徒個々が自己開拓できるよう指導を工夫する。
- 体育実技における参加型授業を展開する。

また、音楽の教師の教科指導方針は以下の通りです。

「参加型授業の本旨に則り、生徒一人ひとりが積極的に授業に参加できる教材の精選や授業の進め方を研究し、実技だけでなく音楽的な知識、教養の定着を図る。

このように、実技教科の教員にも「参加型授業」という理念が定着しているところが非常に大切なポイントではないかと思えます。上記の体育の教員は、昨年度、生徒の主体性を育てるため、グループごとに「集団行動」を創作させ、発表会を生徒だけで運営するという活動を成功させています(動画にあります)。

また、音楽教師も例えばポリリズムの授業でグループでの創作活動を経て全体発表を行うなど、参加型授業の本旨に則った活動を盛んに取り入れていて、生徒の授業アンケートではとても高い評価が得られています(これも動画にあります)。

※ これは昨年8月に行った講演会での参加者からの質問に対してのコメントを後日整理したものである。